

1 文献名
『木曾岬小学校創立百年記念誌』
2 学校名
木曾岬小学校
3 災害名
昭和 34 年（1959 年）伊勢湾台風
4 記述の概要
（1）雨や風、地震などの様子
（2）学校内や地域の被害の状況
堤防が決壊し、午後 8 時頃全村水没した。住民の死者 328 名、重軽傷者、全壊流失その他多大の被害をこうむり、木曾岬小学校全児童 504 名中 57 名もの死者を出した。講堂は流失し、校舎は大破した。（P10、95） 台風の翌日、学校は湖の中にあるようだったが、潮がなかなか引かずどうすることもできなかった。（P26）
（3）復旧の様子
10 月 2 日に児童を鈴鹿電通、高田本山へ収容し、共同生活をはじめたが、授業らしきものはできなかった。10 月 17 日、350 名の児童は鈴峰荘に移転し共同生活学習にあたり、97 名の児童は親せきその他へ疎開した。11 月 26 日帰村し、本校において授業を再開した。（P10） 11 月 20 日、村内の排水はほぼ完了した。（P96） 昭和 35 年 12 月、校舎の補修工事が完成した。昭和 36 年 4 月、講堂及び特別教室 3 室、給食室、用務員室などが新築、昭和 37 年 10 月には、体育倉庫、講堂便所を新築した。（P10） 図書室、工作室、理科室、同準備室と 2 階に講堂という配置で校舎が鉄筋コンクリートで建てられた。（P27） 昭和 36 年、中学校の災害復旧工事が完了した。（P96） 家も仮住まいで大変だった。木曾川の堤防の引堤工事が始まって、家を移転することになり、落ち着いた生活はできなかった。（P83）
（4）体験談
自宅も台風で屋根瓦が飛んで水びたしになり、前の川には満潮ごとに豚の死がいが出てきて、衛生上よくないので、子どもを員弁に預けた。（P26） 伊勢湾台風から 7 年が過ぎても、まだその爪跡が残っていた。校舎 2 階から下へ 3 段目くらいの色が変わっている腰板のところまで「伊勢湾台風の時、水がきた」ことを教えられた。（P33）
（5）教訓など
（6）その他
完成した講堂に舞台が整備され、伊勢湾台風のため途絶えていた学習発表会が再開された。（P29～30）